国立国語研究所学術情報リポジトリ

Colloquial Japanese in Materials from the Early Modern Period : Shorthand Writings and 78 rpm Disk Recordings of Rakugo in the Kanto and Kansai Regions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金澤, 裕之, KANAZAWA, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000809

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 10: 55–84 (2016)
ISSN: 2186-134X print/2186-1358 online

現代に繋がる近代初期の口語的資料における言語実態
――速記本と SP レコードによる東西の落語を対象として――

金澤裕之

横浜国立大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本稿は，明治期に出版された落語速記の作品と，同じく明治期に録音・販売されたと考えられる落語 SP レコードの作品のうち，同一の演者によって行なわれた同一の落語作品を詳細に比較・対照して，その両者における言語内容の実態を明らかにしようとするものである。この両者には，噺の骨格や進め方，更には語彙的な部分においてはかなりの類似性が見られるが，話しことばというパフォーマンス部分から見ると，大きな隔たりがあることが分かった。速記資料における「口語性」を考える場合には，その資料的性格をよく考慮した上で，慎重に判断を加えつつ活用してゆくことが必要であると考えられる *。

キーワード：落語，速記，SPレコード，口語性

1. はじめに

明治期において，語られる言語としての話しことばを可能な限り忠実に活写しようとした試みとして，中期（10 年代後半）から盛んになったものに速記術や，それを活用した出版物としての速記資料がある。これらに関する歴史的な状況については，福岡（1978）を初めとする速記法に関する各種資料をご参照いただきたいが，その中でも触れられている通り，現代にも繋がり得る当時の速記資料としては，一般にも著名な『怪談牡丹燈籠』を代表とする落語や講談などの演芸関係資料と，明治 23（1890）年の第一回帝国議会開設以来，速記によって議事録が残された各種議会の会議録関係資料の二つを挙げることができる。

この両者のうち，一般庶民の日常的な話しことばに近いと考えられる落語資料に関しては，その遺された資料（＝文字資料）がどれだけ当時の実際の言語表現を忠実に映し出しているかという問題について，かなり以前より，識者によるさまざまな意見が述べられてきている。それらの詳細や総合的な評価については，本稿の次節においてある程度詳しく述べることにするが，そこで試みられている方向とは別のものとして，明治後期（36〈1903〉年）以降に紹介・公開された資料に平円盤のいわゆる SP レコード資料があることを活用し，この資料との比較・検討を行なうことによって従来とは異なるアプローチが可能になるのではないかと考えてみた。

本稿は，歴史的な時期としては明治期が主な対象とはなるが，21 世紀の現代にも繋がる音声資料による話しことば分析の最初期のものとして，速記資料と SP レコード資料に遺された東京

* 本稿は，国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」（プロジェクトリーダー：相澤正夫）の研究成果である。また，2015 年 5 月 16 日の国語研究所における同プロジェクト研究会での発表を元に改訂したものである。

及び大阪の落語を詳細に分析・検討する。それにより，それらの資料から浮かび上がってくることばの性格や特性を，実例の紹介も含めて可能な限り忠実に描き出してみることにしたい。（なお，こうしたSPレコードによる録音資料の歴史や詳細については，清水（1996）や都家（1987）などを参照のこと。）

2. 先行研究の状況

三遊亭圓朝による最初の速記本である『怍〈怪〉談牡丹燈籠』（明治17〈1884〉年）が，初期の言文一致運動との関わりなどの点から，文学史上，芸能史上，国語史上の重要な資料としてさまざまな面から注目を浴び，利用されてきているのは衆目の一致するところである。しかしその一方で，この速記本資料の言語資料としての価値や性格については，従来は必ずしも具体的・実証的な面からの調査・解明は行なわれてこなかったと言える。そうした状況の中で一石を投じたと考えられるのが，清水康行氏による論文「言語資料として見た速記本『怍談牡丹燈籠』における二重性」（1983）である。

この意欲作の全体について詳細に述べるのは割愛するが，それ以前は，この作品の謂わば謳い文句として往々使われる「言語を直写した」ものとしての速記（資料）について，この作品の口語性を肯定的に捉えようとする見解（山本1965，野村1977，杉本1962，など）と否定的に捉えようとする見解（柳田他1961，越智1968，進藤1982，など）とがさまざまに語られてきた。それに対して清水論文は，それ以前の見解のほとんどが，いずれも言語資料そのものによる具体的な根拠や裏付けに基づいて展開されていない点に着目し，①順接確定条件の示し方，②動詞の音便形の起こり方，③巧みな“せりふ”の使い方などといった具体的な諸点から作品を詳細に検討した上で，最終的に次に示すような結論を纏めている（清水1983: 212）。

> いずれにせよ，やはり，この速記本『怍談牡丹燈籠』は，全編を通して，円朝の“口演そのもの”を忠実に「其儘に直写」したものと見なすのが無理なことは，やや明らかになったと思われる。そこには，時間の，執筆・校閲者の，“地”対“せりふ”の，様々の二重性ないし複数性の関与した，様々な程度の「直写」の度合をもった表現諸形態が混在し，“口演そのもの”と“速記本文章”との二重性性格を映した，この言語資料を成立させている。そこから，どのようにして，より“口演そのもの”をよく反映した表現を，より“速記本文章”における“作文”となっている表現を，具体的に抽出していくかは，本稿の方法からは未だ導き出せるところではない。しかし，そうした部分があるであろうという見通しだけは示唆できたつもりではある。

また清水氏はさらに後年，「速記は「言語を直写」し得たか—若林珀蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性—」（1998: 50–51）において，若林珀蔵が採用した速記法という技法の書記体系自体の調査･分析からも，前者の場合とほぼ軌を一にする，次のような結論を導き出している。

> これまで見てきたように,『速記法要訣』に示された若林の速記符号の, 少なくとも一部は, 口演の〈（音声）言語〉を〈音〉のレベルに還元して写す〈表音性〉よりも，いったん〈語〉

のレベルに昇華する〈表語性〉，それも活用差を捨象したり，文脈によって複数語に対応し得たりという，かなりに抽象度の高い〈表語性〉を持った符号だと言えよう。

このような符号によって記された「言語」は，たとえ，それが能く口演を「直写」し得たものであったとしても，抽象化された表語符号じしんの介在によって，反訳に際して，もとの口演とは異なる語形に置換され得る〈揺れの可能性〉を，しばしば留保することとなる。

具体的・実証的な調査検証に基づくこうした清水氏の見解は，現時点では揺るぎようのない一つの定見として評価できるのではないかと考えられる[1]。そして，そうした評価を認めた上で，他の膨大な速記資料に関して，清水氏とは異なる方向から，その言語的性格を検証することができないかと考えて行なってみたのが，次節以下の本稿の試みである。

3. 資料の選択

前節で述べたような経緯を踏まえて，本稿では，調査対象を明治期に出版された落語速記の作品と，同じく明治期に録音・販売されたと考えられる落語 SP レコードの作品のうち，同一の演者によって行なわれた同一の落語作品を詳細に比較・対照して，その両者における言語内容の実態を明らかにしてみたいと思う。

このうち，速記資料に関しては，東京落語の場合は，明治 22（1989）年から盛んに出版された速記雑誌『百花園』他に掲載された落語を対象とし，具体的な資料としては，参照文献に挙げた暉峻康隆他編『口演速記　明治大正落語集成　第一～五巻』（1980）を調査対象とした。また，大阪落語の場合は，同じく参照文献に挙げた肥田皓三「大阪落語の速記本（一）～（八）」（1977～78）を参照し，そこで紹介された国会図書館などに所蔵されている速記資料を具体的な調査対象とした。一方，SP レコード資料に関しては，金澤裕之「明治末･大正･昭和前期の SP レコード資料一覧」（2015）において紹介した，金澤自身が収集した音声資料を具体的な調査対象としている。

その結果，筆者によって収集できた両資料のうちで，先に挙げた条件に当てはまると考えられる作品は，次に示す通り，東京落語で 7 作品，大阪落語で 4 作品の，合計 11 作品であった[2]。なお，

---

[1] 矢島正浩氏は，時代はある程度下った昭和初期の資料となるが，五代目笑福亭松鶴口演による上方落語の 3 作品を対象として，速記本の場合と SP レコードの場合の比較･対照を，テーマを条件表現（仮定表現及び原因･理由表現）に絞って行なっているが（矢島 2006，2007），そこでの結論も，大略は清水氏の結論と同様の方向性を示していると考えられる。矢島（2006: 14）から，両者の資料性に関するまとめの部分の一部を引用しておく。

以上のように，落語における音声の録音資料と，速記本という文字資料とが，言語の質において，相当程度隔たりを持つものであることが明らかになった。その隔たりは，大略して言えば，音声資料に比べて文字資料では古態を反映する指向，及び規範を意識する傾向が強いことによって生じているとみることができよう。

両資料の比較を通して追究していたのは，筆記という言語活動において求められる，あるいは結果として帯びざるをえない，「普遍的なるもの（＝規範性・標準語性）」の具体的な内容であったと言い換えることもできる。この特徴を持つ速記本と，そういう制約がかかりにくい録音資料との比較により，国語史上の歴史を凝縮した形で見出すことができるかもしれないということを具体的に見た。

[2] この点については，筆者による見落としも考えられるため，作品数はもう少し増える可能性もある。

落語の場合，たとえ「同一の内容」であっても，噺の題名自体が異なることはさほど珍しくはないので，そうした例の題名には＊印を付しておく（題名等の詳細については，後の 5 節を参照のこと）。

まず先に，それら 11 作品のデータを，列挙してみることにする。

【東京落語】

初代・三遊亭圓遊〔嘉永三（1850）～明治四〇（1907）〕

・「成田小僧」　《速記》『百花園』一巻一号（明治二二 1889）
　《SP》　英国グラモフォン（明治三六 1903）〔3:16〕

・「太鼓の当込＊」　《速記》『百花園』一巻五号（明治二二 1889）
　《SP》　米国コロムビア（明治三六 1903）〔2:39〕

・「地獄旅行」　《速記》『百花園』七巻七一号（明治二五 1892）
　《SP》　米国コロムビア（明治三六 1903）〔2:58〕

・「野ざらし＊」　《速記》『百花園』十巻一〇三号（明治二六 1893）
　《SP》　英国グラモフォン（明治三六 1903）〔2:57〕

三代目・柳家小さん〔安政四（1857）～昭和五（1930）〕

・「粗忽長屋」　《速記》『百花園』一六巻一六〇号（明治二八 1895）
　《SP》　独逸ライロフォン（明治四四 1911）〔4:34〕

・「花色木綿＊」　《速記》『百花園』一九巻一八四号（明治二九 1896）
　《SP》　独逸ライロフォン（明治四四 1911）〔5:41〕

四代目・橘家圓喬〔慶応一（1865）～大正一（1912）〕

・「柿と栗の喧嘩＊」　《速記》『百花園』一八巻一八〇号（明治二九 1896）
　《SP》　英国グラモフォン（明治三六 1903）〔1:53〕

【大阪落語】

二代目・桂文枝〔弘化二（1845）～大正五（1916）〕

・「近江八景」　《速記》『桂文左衛門落語集』（博多成象堂，明治四一 1908）
　《SP》　独逸ライロフォン（明治四四 1911）〔1:41〕

三代目・桂文三〔安政六（1859）～大正六（1917）〕

・「漆山角力の噺＊」　《速記》『笑となみだ』（積善館，明治四一 1908）
　《SP》　米国コロムビア（明治三六 1903）〔2:52〕

初代・桂枝雀〔元治一（1864）～昭和三（1928）〕

・「蛸の手＊」　《速記》『高座の色取　第二集』（杉本書店，明治四〇 1907）
　《SP》　日蓄ローヤル（明治四三 1910 頃）〔3:13〕

四代目・笑福亭松鶴〔明治二（1869）～昭和一七（1942）〕

・「愛宕参り＊」　《速記》『笑となみだ』（積善館，明治四一 1908）
　《SP》　米国ビクター（明治四一 1908 頃）〔2:42〕

4. 比較・検討の方法について

これまで，本稿で対象とする二種類の明治期落語資料について，その概略を述べてきたが，そこでもほぼ想像がつく通り，この二種類の資料には，資料そのものが持つ特性や限界などから，本質的に大きな相違がある。その点を最初に述べておくと，次の通りである。

【速記本】

・元来は文字資料である。

・演者による口演を，速記記号を媒介として「写し取った」とされるが，最終的な文字資料となるまでに，記号化・反訳・編集といった過程があり得るため，どこまで口演そのもの（の音声）に忠実であるかは不明である。

【SP レコード】

・元来は音声資料である。

・技術的な面で，録音や再生における平円盤の回転数がかなり高いため，1 面の録音可能時間が短い（明治期では，2 ～ 3 分程度）ので，必然的に短い時間の口演（＝噺）しかできない[3]。

・録音は，いわゆる「一発勝負」となるため，言い間違いや時間切れなどの不完全な部分があり得る。

こういった，資料そのものの本質的な違いから，いくら同一演者による同一の作品であっても，作品としての形が必ずしも類似するものとなるわけではないが，以上のような点を承知の上で，前記の 11 作品について，その言語表現において共通すると見られる部分を基準として分類してみると，凡そ次の三種類に分けられるのではないかと思われる。具体的な作品名を含めて紹介すると，結果は次の通りである。

A： 具体的な言語表現としては，共通する部分がほとんどないもの

「成田小僧」，「太鼓の当込」，「地獄旅行」，「野ざらし」

B： 全体の流れや一定の文脈などに限定すると，ほぼ共通する言語表現が（部分的に）見られるもの

「粗忽長屋」，「花色木綿」，「近江八景」，「漆山角力の噺」

C： 噺の全体に亘って，ほぼ同一の展開や言語表現が見られるもの

「柿と栗の喧嘩」，「蛸の手」，「愛宕参り」

次節では，この分類に従って，個々の作品について具体的な様相を紹介してみたい。なお，最初の題名の後に，東大落語会編『増補落語事典』（1969）に従って，それぞれの作品における当該の部分を適宜〔梗概〕として引用しておく（同事典に該当項目のない場合は「ナシ」とする）。

[3] こうした点は，資料そのものの一般的な価値から考えると，短所であるとも思えるが，他の面から考えると，そのために，（古典的な名作や大作ではなく，）当時の何気ない世相を描いた小噺やちょっとした作品が多いために，結果的に，当時の実際の話しことばの断片を活写している可能性があり，この点では，言語資料としての長所となっていると考えることもできる。こうした特性については，次節の「太鼓の当込」の部分で言及する清水（1982）の引用部分でも，同様の見解が示されている。

また，C グループに属する 3 作品については，次の 6 節においてより詳細な比較・検討を行なうため，5 節では梗概及び作品の具体的な紹介に留めておく。

なお，【SP】の漢字仮名交じりによる文字化は金澤による[4]。

5. 検討の実際

5.1 A グループ

A グループには，「偶々（たまたま）」と言えるかもしれないが，初代･三遊亭圓遊による 4 作品が該当した。

(1) 「成田小僧」（題名は，両者とも同じ。）〔梗概〕本郷春木町の塗り物屋十一屋の若旦那清三郎は，父親の名代で深川の不動へまいり，帰りに料理屋へ上がって食事をした。一緒につれて来た小僧の長松がたいへんなおしゃべりで，手洗いに来た美しい芸者小千代を見つけ，若旦那に呼びなさいとすすめて呼んだことから，若旦那と小千代はなれそめる。（後略）

この作品の中で，わずかでも両者の表現に対応が見られたのは，次のような件りである。

【速記】「早く挽車（くるま）に乗つてガラ〳〵と往きてエナ……オイ若い衆（しゅ）さん〳〵」「何んだツて挽車夫（くるまや）を呼ぶんだヨ」

【SP】「そんなことを言うんじゃないよ。何だって俥をあつらえるんだ」「あのガラガラって行っても早くってようがすから」

【速記】「真正（ほんと）に口の軽い小僧さんで居らツしやる事」「ヘエ何貫目有まして。俺（わたし）の口の貫量（めかた）を衡（かけ）た事が有ますか」「アラマア，顔から火が出ますヨ」「物騒な顔だ，和女（おまへ）の顔はマチ入らず」「アラ何（ど）うも。何にも妾（わたし）には云へません。左様なら」

【SP】「おや，これはいらっしゃいまし，よくどうもご苦労さまで」「エー姐（ねえ）さん，ご苦労さまてなどういうんでげす」「アーラまァ，どうも誠に失礼を致しました。どうも実に顔から火が出ます」「物騒な顔でげすなァ，どうも」「エー，アーラ，どうもそんなにどうしてまァ，口がお廻りになりましょう」「エー，この口が廻っちゃァ顔がこわれちまいますからなァ」

見て分かる通り，例えば後者の例では「顔から火が出る⇒物騒な顔」というクスグリは共通しているが，両方の例ともに会話の流れや具体的な表現の面では，かなり異なっている様子が見て取れる。

(2) 「太鼓の当込」（題名は，速記本では「思案の外幇間（ほかたいこ）の当込み」。）〔梗概〕ナシ

この作品の中では，一箇所のみであるが，ほろ酔い機嫌でお座敷から帰る時の幇間の独り言の中に，文脈がほぼ一致する部分が見られる。

【速記】「（略）と独言（ひとりごと）を云ひ，蔵前通りを帰り乍（なが）ら鼻歌にて「何か茲（ここ）らに金目なものが落ちて

[4] 聴き取れない箇所は「○○」，間（ま）の長さは「……」，助詞が省略されていると思われる箇所は「（は）」「（を）」などで示した。

居ないか……オヤ落ちてたヨ，男帯だと思つたら鉄道の線路で御座いますヨ……何か茲らに……オヤ落ちてたヨ，熊の皮の革嚢(かばん)が落ちて居たと思つたら洋犬(かめ)のチンコロで御座います…（中略）ア痛(いて)エな，何だツて人の頭を打殴(ぶんなぐ)るんだ……なんだ郵便箱で居やアがる。是は恐入つたな……」

【SP】「有難いなァ。今二階にいたかと思うと表へ出て，折を下げてブラブラ歩き。こういう運が向いてきた時にゃ何か拾うよ。こりゃァ，エー。♪何か落ちてりゃすぐ拾う，チャン，どこかに金目なものは落ちてぬか，おや落ちてたよ。男帯だと思ったら，電車のレーロでございますよ。（中略）また落ちてた，大きな敷布団が一枚落ちてたと思ったら，水道(すいど)の蓋でございますよ，ヨイトサ。おやッ，アー，ア痛(いて)ェ，何だいまァ，恐(おと)ろしいまァ，何だってまァ，電車の柱へ頭ァぶっつけて，ズーンと応えた……」

ただし細かく見ると，噺に登場する物が，「鉄道の線路」「熊の皮の革嚢」「郵便箱」から「電車のレーロ」「大きな布団」「電車の柱」などと多少の変化を見せている。

なお，こうした点について清水康行氏は，この（「太鼓の当込」の中の）同一部分を例示しつつ，次のように述べている（清水 1982: 53）。

> いったい，当時の落語に登場する風俗，人物は，時に江戸時代を舞台とすることもあるが，長屋暮らしにしろ，廓遊びにしろ，人力車にしろ，野幇間やら若い衆にしろ，それぞれ東京の都市生活における或いは特殊な一面であったにしても，明らかに，演者にとっても，聴衆にとっても，同時代のものであった。そこでは，彼等のことばも，地・せりふ共に同時代的＝当時の“現代”的であったことが，期待できる。
>
> こうした“同時代性”が，私に，当時の落語レコードを，当時の東京口語研究資料として，期待させる理由のひとつである。また，時代が下るにつれ，落語が“古典”化し，“同時代性”を失っていくことが，落語レコードを，後の時代，たとえば現代の東京語資料として注目するのをためらわせる理由となる。（後略）

(3)　「地獄旅行」（題名は，両者とも同じ。）〔梗概〕源さんと八さんの二人，隠居さんにもらった旅行薬を飲んで地獄へ旅行する。二人は役人につかまって，ざんげをさせられたり，三途の川を赤鬼の渡し舟に乗って渡ったりしているうちに，エンマ様に呑まれてしまう。二人は腹の中で筋を引っ張って，エンマにくしゃみをさせたり，しゃくを起こさせたりしているうちに，隠居さんのところに逆戻り。「おまえがた二人がエンマ大王の腹から出られたわけだが，飲んだ薬が大黄の黒焼きだ」「道理で至極（地獄）利きがよかった」

この作品では，三途の川の渡し守である赤鬼が唄う舟歌の部分と，噺の最後のサゲ（落ち）の部分に，共通した箇所が見られる。

【速記】「サア船が出るよー」と声を掛けると，ドカ〳〵亡者が乗込んで是(これ)から腕の良(い)ひ船頭で艪を取つて鼻唄を唄ひながら漕出しましたが，宜(い)い心持で御座います。

（鼻歌）「那落の底でもエー剣の山はエー，西も東も金だらけエー」

【SP】「さァ, 舟が出るよォー」ぞろぞろぞろぞろ舟へ入りましたが, 赤鬼に一本, 竿を張ります。「♪おゥー，奈落の底でも，エー剣の山は，エー，西も東も，エー金ばかりィー，ってなナァ，ハイコリャー。……」

【速記】「モシ御隠居様，那の薬は何で御座います」「那れはお前方両人が腹から出る訳だ。呑んだ薬は大王（大黄）の黒焼だ」「道理でぢごく（地獄）利きが宜かつた」

【SP】「おォおォ，何だ。先生のおしまい。腹から出ちまったよ。今のお薬は」「あれは薬ではない。あれは大王（大黄）の黒焼きだ」「道理で，至極（地獄）効きがよかった」

ただし，これら以外の部分には，ほとんど共通するところは見られない。

(4) 「野ざらし」（題名は，速記本では「手向の酒」。）〔梗概〕（前略）向島で八五郎は，人の目もかまわず，いい女の幽霊がたずねて来るのを想像して浮かれながら，地べたにすわり込んだり, えさもつけない釣り糸で自分のあごを釣ったりしているうちにカラスが飛び立つ。探してみると人骨があったので，いわれたとおり酒をかけ，自分の家を教えて，きっと来ておくれといって帰る。これをかたわらの屋根船の中で聞いた幇間が，女と会う約束だと思い，祝儀をもらえるだろうと夜八五郎の家にやって来た。女の幽霊が来ると思いきや，口の悪い男がべらべらしゃべるので「おまえは何者だ」「新朝というたいこ（幇間）です」「なに，新町の太鼓。しまった，昼間のはウマの骨だった」

この作品の場合も途中には全くと言っていいほどに類似する表現は見られず，共通するのはやはりサゲ（落ち）の部分だけである。

【速記】「エヽ，恐ろしい鼻の大きな口の悪い骨が来たが，汝一躰何処の者だ」「斯う見えても新朝と云ふ幇間でげす」「ハアー，それでは葭の中のは，馬の骨であつた」

【SP】「一つどんなもんでげすなァ」「アヽ全く，お前は幇間と言うが，何だい」「私は新朝という幇間でげす」「お前は新町（新朝）の太鼓（幇間）か。あァしまった。昼間のは馬の骨であったわい」

以上，A グループに属する 4 作品を検討してきたが，それぞれの作品で見てきた通り，噺全体の流れや表現にはほとんど共通する部分はなく，サゲ（落ち）やクスグリ・唄・特徴的な場面などに共通する文脈が稀に見られるが，その場合でも個々のことば遣いや具体的な名詞などには，異なる場合が多く観察されるのである。

5.2 B グループ

次に，B グループに属する作品について具体的に検討してみる。この場合は文脈がほぼ共通する引用部分が長くなるため，東西の落語から一つずつとして，「花色木綿」と「漆山角力の噺」を取り上げる。〔その他の 2 作品の場合も，梗概は記しておく。〕

(1)　「粗忽長屋」（題名は，両者とも同じ。）〔梗概〕ひとつ長屋に住む八つぁんと熊さん，いずれ劣らず大変そそっかしい。ある日八つぁんが浅草の観音さまに参詣をして，雷門を出て来ると，行き倒れに黒山の人だかり。「あっ，熊の野郎だ……。けさも寄ったときにぼんやりしてやがったが，ここで行き倒れになってるのに気がつかねえんだ」この人は昨夜から倒れているんだといわれても「いえ，とにかくここへ当人を連れて来て死骸を引き取らせますから……」と八つぁんは，死んだ心持ちがしねえとぐずる熊さんをむりやり引っ張って来る。死骸に対面した熊さん，抱きあげて眺めていたが「わからねえことができちまった」「なにが」「この死人はおれにちげえねえが，抱いてるおれは誰だろう」

(2)　「花色木綿」（題名は，速記本では「出来心」。）〔梗概〕（前略）まぬけな子分の泥棒が，やっと留守の家を見つけてはいったが，貧乏でなにもとるものがない。そのうちに主人の八五郎が帰って来たので，泥棒はあわてて縁の下にかくれた。八五郎は足あとを見つけて，泥棒がはいったのに気がつき，これを利用して店賃のいいわけをしようと大声で家主を呼び，あれも盗まれた，これも盗まれたという。家主は盗難届けを出すからと品物を書きとめはじめる。八五郎は，まずふとんで，裏が花色木綿というと，羽織，カタビラ，タンスまで裏が花色木綿と口から出まかせ。縁の下で聞いていた泥棒がたまりかねて笑い出し，見つかってしまった。泥棒が家主に「どこからはいった」と調べられ「裏からはいりました」「裏からはいった？　ここの裏を一体なんだと思っている」「へえ，裏は花色木綿」

【速記】「盗難届を早く仕無いと私の落度になるが，何を取られたのだい…警察へ届けなければならぬから…」「然んな事は宜う御座います」「早く届けて置くと，泥棒がつかまると…詰り其品が貴様に返るのだ…」「夫れは有り難う御座いますな…本当ですかな…」「上に嘘が有る者か…」「夫れは〆込んだ…他で盗んだ品でも私にかへりますか」「わきのはもらへやしないヤア」「夫れぢや宜いや…」「貴様が能くても乃公が不可無い。何を取られて仕舞つたか」（中略）「家主さん，泥棒の取つて行き然うな物は何でしよ…」「泥棒の目掛ける物は金子の外に着類…何れ着類だな」「然う〳〵，四ツ屋丸太の端切れが三本」「着類だつて，然んな者ぢや無いよ。身躰に着る物だよ…」「夜具布団…」「大変な嵩張る物だな。何んな夜具だ…」「綿の這入つた夜具…」「綿の這入つた夜具…分ら無い奴だな。乃公書き付けるのぢや無いか，夜具は何な夜具だい…綿ははいつて居るよ」「宜い夜具で…」「宜い夜具とは書け無いよ…表は何だい…」「表は中々賑やかです…」「表を聞いて居るのでは無いよ，夜具の表は何んな物だと聞いて居るのだ」「其所の所が…家主さんの物干しに有つたのは何んですね…」「唐草木綿…」「早々，唐草木綿…」「人の言ふ成りだな…裏は…」「抜け裏…」「馬鹿だな，抜け裏と云ふ裏が有るかい。夜具の裏だよ…」「家主さんの所は…」「一々五月蠅な…彼は丈夫向きに温かいから花色木綿」「エー…温かいから丈夫向きに花色木綿」（中略）「夫りや一組か…」「五十組」「五十組。大変に取られたな。そんなに貴様の所に有つたのか…」「横町の宿屋に有るのだ…」「一組か，余計な事を云やがつて。跡は…」「宜い着物…」「宜い着物と云ふのは無いや…物の何だい」「大した物です…」「大した物ぢ

や分ら無いよ…物は何だよ」「黒羽二重…」「黒羽二重。そんな物を持つて居たか…」（中略）「紋は何だい…」「雷門…」「雷門と云ふ奴が有るかい…紋は無いのか…」「へエー…」「無紋か…真黒だな」「表は唐草…」「黒羽二重に唐草…何んだか分ら無いな，宜い加減の事斗り言つて…跡は何んだい」「帷子」「どんな帷子」「経帷子…」「経帷子と云ふ奴が有るかい。物は何だよ」「ぞうふ…」「ぞうふと云ふ奴が有るかい。上布か…」「上布〳〵…」「言ふ事が皆違つて居るよ…縞か飛白か」「しま」「どんな縞だ…」「佃島…」「佃島と云ふやつが有るかい…」「竪の筋で細かい…」「大名か…」「旗本…」「分ら無い奴だな。竪の細かい物は大名と言はア。跡は何だい…」「表は唐草，裏は花色…」「帷子の表に唐草だの裏の有る帷子が有るかい」「丈夫向きで温かいから」（中略）「夫から跡は…」「親重代伝はりの刀一張…」「刀の銘は有るかい」「めいはないが，伯母さんが神田にある…」「親戚を聞いては居無いよ」（中略）「銀貨や何か皆取られて仕舞つた…」と云ふ。是れを聞いて居た泥棒，出て来て「何んでい…張り倒すぞ，此野郎…」「何んだい…待ちなさい…」「何だと，先刻から聞いて居りや，札だ刀だ，帷子だ…何にも無ぢや無いか…」「何を言ふのだよ。乃公家主だよ。巫山戯やがつて。何だと思つて来やがつた…貴様盗まなくとも泥棒ぢや無いか。乃公家主だ…」「へエー…」「へエぢや無い」「誠に相済みません…」「何にも取ら無いのだから縄付きは出したく無い。これ手前も手前だ。何だつて取られも仕無い物を，札が幾等だの夜具布団帯だの蚊帳刀なんて，然んな馬鹿な事を言いやがつて」「へエー…是れはほんの出来心で御座います」（終り）

【SP】「何しろ届けなくっちゃいかねえ。警察にな。盗難届てェやつゥ出すんだ。品物は俺が書いてやる。エー，矢立があるか。何を盗られたい」「何を盗られたって，みんな盗られちゃったんで」「みんなと書く訳にいかねえんだ。解らねえやつだ。早く届けておきゃあ，泥棒が捕まりゃァ，その品を持ってりゃ，貰えるよ」「そいつァあ有難ェねえ。全くでやすかい」「全くったって，他に入所があるものかい」「○○ちゃったなァ，どうも。脇で盗んだのは，くれますかい」「馬鹿，脇で盗んだの，くれるもんかい。貴様の盗まれた，だけだ」「ああ，それじゃあいいんだ。ネー，ンじゃまあ，ようがす」「よかァないよ。何を盗られたんだ，早く言え。書き付けるから」「大家さんの前でやすがなァ，エー，泥棒は何を持ってくでやしょう」「何を持ってくか，俺は泥棒じゃない，知らねえが，まず目掛けるのは着類だなァ」「あはァ，そうそう，すっかり忘れちゃって。エー，檜の総板に藤板でがす」「何言ってやる，馬鹿野郎。キルイったって，材木じゃないよ。着類てェのは，身体へ着るもんだ」「アッハハ，そうそう，夜具布団」「おっそろしい，嵩ばりものォ盗りやがった」「へエ，大変な嵩ばりもんでごわす」「夜具布団はどんな夜具だ」「エー，綿の入った夜具」「綿が入ってる…，夜具はみんな綿が入ってる，馬鹿野郎。表は何だい」「表はびしょびしょしてて，道が悪うごわす」「何を言ってやがんだ。往来を聞いてるんじゃねえ。馬鹿だな，下らないことばっかり言って。夜具の表は何だてんだ」「大家さんとこで干してあるの，あれ何でがす」「あれなら，唐草木綿だ」「ああ，唐草木綿」「裏は何だい」「抜け裏」「抜け裏てのがあるかい，馬鹿。その裏じゃないよ，夜具の裏だ」「大家さ

んとこの，あんなんでがす」「あんなんなら，丈夫向きに暖(あった)かいから，花色木綿が付いてる」「ああ，丈夫向きに暖けえから，花色木綿」「そりゃ一組か」「五十組」「五十組てェ，そんなにあるのかい」「横町の損料屋にある」「損料屋なんざどうでもいいんだが，貴様の盗られたのは一組だな。何でも下らねえことばっかり言ってやがる。後は何だい」「着物」「着物は何だい」「立派な着物」「立派とは書けない。モノは何だい」「モノは黒羽二重」「黒羽二重とは大したもんだなァ。エー，紋は何だ」「雷門」「雷門ってやつがあるかい。何だよゥ」「真っ黒なんで」「真っ黒ォ？　黒羽二重に真っ黒てェのはおかしい，紋無しだよ，紋無し。裏は何だ」「花色木綿」「アレッ？　花色木綿，羽二重へ付けるやつがあるかい」「丈夫向きに暖けえから」「何でも花色木綿だなァ。後は何だい」「後はァ，夏物」「夏物は何だ」「西瓜に真桑瓜に氷水」「何，氷水なんぞは…。馬鹿だなァ下らねえ。食い物(もん)じゃないよ。エー，夏物なら単衣物(ひとえもん)とか帷子(かたびら)」「ああ，帷子」「どんな帷子」「経帷子」「経帷子てェのはない。帷子の，モノは何だい」「モノは上布」「上布ってやつがあるかい。それは縞か絣(かすり)か」「縞」「どんな縞だ」「佃島」「佃島てェのがあるかい，馬鹿。ンなまァ，何でもいい，見計らいで付けるが，エー，後は」「後はね，裏は花色木綿」「おゥおお，何を言ってやがる。帷子に裏ァ付けるやつがあるかい」「丈夫向きで暖けえから」「馬鹿野郎，下らないことを言う。ンなものはどうでもいいんだ。後は何だい」「後は宝物」「何だい」「親重代伝わる刀」「オオオ，大袈裟なことばっかり言ってやがる。その刀は銘があるかい」「姪はごわせんがね，京橋に叔母さんがあります」「何をいってやがる。言うことは間違ってる。後は何だ」「エー，ザキをみんな盗られちゃったんで。店賃なんぞね，貯めといて一時(いちどき)に払ってやろうと思ったら，それをみんな盗られたんで」泥棒がそれを聞いたから，腹ァ立ちます。「やいやい，何をぬかしやがんだ！」「おう，喧嘩しちゃあいかん。喧嘩しちゃあいかん」「お前，俺の入った泥棒なんで，何も盗らねえ。盗った盗ったと言いやがる」「われ，手前(てめえ)，盗っ人ォじゃねえか。家主がついちゃいけねえ。何しに入って来たんだい。この裏ァ何だと思ってるんだい」「花色木綿だてェ…」（終り）

以上，両者を長く引用してきたが，速記本の場合の「中略」部分を除くと，こうした部分でほとんど共通の，会話のやりとりが続けられていることが分かる。ただしその一方で，落語の眼目の一つとも言えるサゲ（落ち）の部分が異なっており，それが題名における全くの相違にも反映しているわけだが，こうした“融通無碍”と言うか，ある種の“いい加減さ”のようなところに，落語という演芸の特性の一端が現れていると考えられて，興味深い現象と言える。

(3)　「近江八景」（題名は，両者とも同じ。）〔梗概〕ある男，大道易者に見てもらう。（中略）男は芸妓から来た近江八景づくし「あんたを一目三井寺から，心は矢橋にはやるけど……」という手紙を見せる。易者はやはり八景づくしで「どうも瀬田（世帯）が持ちかねる。いっそのこと粟津（会わず）に青嵐（添わん）がよかろう」といましめると，男は「ありがとう」とそのまま立ち去ろうとする。易者が「見料を置いて行かんか」「近江八景（八卦）に膳所(ぜぜ)（銭）はいらねえ」

(4) 「漆山角力の咄」（題名は，速記本では「相撲」。）〔梗概〕ナシ

【速記】「モシ関取永いことお目に懸りませんなァ」「ヤツ，是りやァ町内のお若いのでござりますか，永らくと御無沙汰を致して居りまして」「何處へ行つて居なすつたい」「ハイ，永らく東京の方へ修行に行つて居りました」「夫りやァ宜いことをして来なすつたなァ，相撲は東京ですなァ，甚い失禮なことを言ひますけれども，回向院の本場所で取りなすつたかい」「私のやうな相撲では回向院の本場所などで取らせて貰う譯には参りませんが，親方衆や頭取衆に可愛がられましてお慈悲で取らせて頂きましてござります」「アノ可愛らしいものぢや，人間は然う行きたいなァ，併し失禮なことを尋ねますが，出来は何うでしたえ」「初めて上りましたでなァ，お互に出世相撲でござりまして，捗々しいことはございません，頓とモウ勝つたり負けたりでござりますわい」「アー尚ほ可愛らしいなァ，遠い處ぢや，何ぼ嘘を吐いても構はぬのに，勝つたり負けたりとは嬉しいなァ，で，初日は何うでしたえ」「遣られました」「何うも仕様がない，で，二日目は何うでした」「二日目は，ヨイと起上りますと，蹌踉いて手を支いて負けました」「オヤ〳〵，で，三日目は」「三日目はドンと鉄砲をば…」「遣りなすつたか」「吃ひましてなァ，蹌踉いて尻餅を搗きまして，是れも負けになりました」「ヘエー，四日目は」「四日目はドンと頭突を吃はせた…」「豪い」「相手がヒョイと後へ避りました，虚吃つて負けました」「何もならんなァ，五日目は何うでした」「五日目は最う私ァ躰が硬くなりました」「ヤツ其奴は可かんなァ，硬くなると云ふのは」「ヨイと起上りますと，首叩きを吃ひまして，四這に這ひまして，土を仰山喰ひました，東京の土は旨うござりませんわい」「六日目は何うでした」「焼糞起して横ッ面殴りました，ポンと」「モシ，當時は其の殴り手は封じられて居るぢやァありませんか」「マア私等の地位では構ひません，ところが先方がヒョイと横へ避けました，虚吃つて轉びました」「七日目は何うでしたえ」「七日目はヨイと起上るなり，三絡と前袋をとりましてなァ，グツと上げました」「大相撲ですなァ」「ヂリ〳〵と土俵の處へ押して行きました」「豪いわ」「ところが先方は私より大きな奴でなァ，土俵の剣身でグツと反りました」「面白い相撲ぢやなァ」「ウーンと押しましたら，先方はグルリと廻つてな，私ァ先きに土俵の外へ足を出して是れも負けになりました」「八日目は何うでした」「八日目かな，足取りに行きましたら，首押へられて負けた」「九日目は何うでした」「遣られました」「十日目は」「邪魔臭いから序に負けて置いた」「気楽な相撲取やなァ」（中略）「併し貫方，横町に在なすつた間には八がれ樫之助でしたなァ，當時でも然うですか」「ナアニ，東京へ参りまして名前を改へましたわい」「何ちう名ですえ」「鍋蓋と改へました」「鍋蓋…稀代な名前やなァ」「取ったら仰向けに轉倒ります」

【SP】へい。エー，大阪落語の桂文三が，えーっと，角力のお噺を申し上げます。

「ああー，関取，長いこと居ませなんだなァ」「いやァ，こらァお町内のお若いのでござりますか，ご無沙汰をいたしましてな。私は長らく，東京へさいて，修行に行っておりましてなァ」「さよかいな，結構やなァ。まあ，何し（ろ），角力は東京でやすわい。しかし，何でやすかァ，回向院の本場所ォでは取りなしたかい？」「私らはなァ，回向院の本場所ォ

などは，到底取るわけには参りませんがな，頭取と親方衆に可愛がられてきましてなァ，お慈悲で，取らしていただきましてございます」「母じゃ人，聞いてはるなァ。あたしらみみやって，こんなよな勝手も分からんのに，……。どうです，角力はどういう出来でした？」「どうも，はかばかしゅうございませんも，ほんの，勝ったり負けたりでございましてなァ」「だがあんた，すっきりだんなァ。ええッ，勝ったり負けたり…。誰でも，遠いとこのことは，嘘つく人は多いでェ。初日はどうでした？」「初日は，分かりませんので，鈍（どん）な角力を取りましてなァ」「初日，負けましたか」「……なりましたわい」「二日目はどうでしたい？」「二日目は，どおっと立ち上がりになァ，手をつきまして，負けになりましたわい」「ほう，さいでやすか。二日目負けなしたんか…。三日目はどうでやした？」「三日目はァ，すこゥし体が固くなりまして，だあっと四ッつにわたりましてなァ…」「それきた」「ふんどしを持ってずーっと払い上げられかけて行きましたが，向こうが背が高（たこ）うございますから，土俵の……よってなァ」「へい」「くるっと回って，私，土俵の外に抛（ほ）り出されましたわい」「結構負けなすったんやな。四日目，どうでやした？」「四日目はばあっと首叩きをくらいまして，四（よ）つ這（ば）い這（ほ）うて，土を喰（く）いましたが，東京（とうきょう）の土は，あまり旨（うも）うございますまい」「どこの土やこと旨いことあらへん。五日目はどうでやしたん？」「五日目は，ものの見事に負けよったわ」「六日目は？」「六日目は何（なん）か，横面（よこづら）を張りよったら，バーンとまた…，負けて。七日が負けて，八日負けて九日（ここぬか）負けてなァ。十日は序（つい）でに負けましたわい」「序でに負けるちゅよなお角力取り。あなたはやっぱり今でも，八（はち）がれ樫之助でやすか？」「なあに，私（わたし）ゃ今，大安売りとなりましてなァ」「大安売り！ ああ，誰にでも負けてやりよるのじゃわい」

以上に見てきた通り，この二つの資料（＝作品）の場合はある意味で典型的な「同工異曲」であると言える。大阪の相撲取りが東京へ修行に行き，頭取や親方に可愛がられて回向院で十日間の相撲を取るが，「（相手が）勝ったり（自分が）負けたり」ということで，結局のところ十日間負け続ける顛末を語り，最後に四股名（名前）をいかにも弱い力士を表す名前に替えるという，全く同一のストーリー展開である。但し，話の中心にもなる負け方の描写や，サゲ（落ち）にもなる弱い力士を表す四股名（名前）の具体例も大きく異なっており，筋道や骨格はほぼ同一であると言えるのに対し，個々の場面や固有名詞などは異なっているという，明確な対照を見せている小品である。

5.3 C グループ

次に C グループに所属する 3 作品を見てみるが，先にも述べた通り，この節ではそれらについての「梗概」及び，具体的な紹介のみに留めておく。（「蛸の手」には，梗概ナシ。）また，「愛宕参り」は他の作品と比べて全体がかなり長いので，ここでは，両者のほぼ後半部分のみを引用することにする。

(1)　「柿と栗の喧嘩」（題名は，速記本では「栗と柿」。）〔梗概〕秋になって木の葉が落ちるころ，

カキの葉が「寒い, 寒い」といいながらクリのいがの上に落ちた。「いてて」「おお, 寒いなあ」「なにが寒い。おまえはいがを着て，皮を着て，その下に渋皮を着てるやないか。おれなんか皮一枚や」とけんかしていると，横からマツタケが「おれを見てみい，この寒いのにふんどしもしてへん」

【速記】古いお話に栗と柿と喧嘩を仕たといふお話がありますが，柿の方は誠に貧乏で葉も何も振つて仕舞つて，栗の方は大変に皮を冠つて居る。

「栗公……」「ヱヽ」「寒いなァ」「寒いやァ」「寒いけれ共和郎なんぞは三枚重ねだから寒い事はねへや。渋皮に皮に毬を着て居るだらう。乃公を見やな，柿衣一枚だ。済まねへが何れでも能から一枚貸しねへな」「串談いつてらァ。三枚重ねだから何れを一枚貸すといふ訳にもいかねへ」「何故……」「だつてどれを脱だつて困らァな」「それぢやァ朋友甲斐がねへといふものだ」「和郎なんぞは貧乏性で柿衣一枚で居るんだ。先祖を恨みねへ」「ナニ，貧乏性だ」「左様よ。貧乏性だから貧乏性だと云ふんだ」「箆棒め。貸さねへなら貸さねへでいゝ。貧乏性まで云はなくつても宜からう。何を生意気な事を云やァがる」

と柿は赤色になつて飛び附いたが栗には敵はない。毬で突つ突れてゴロ〳〵と落ちる途端に，下に生て居た松茸の横ヅ頬へポカリ。「アヽ，痛へ」「済まねへが堪忍して呉んねへ」「柿が何うした」「ナニ, 今栗と喧嘩をした」「何んだつて……」「彼様分らねへ奴は有りやァ仕ねへ。着物を三枚着て居るから一枚貸せと斯う云ふと，手前は自躰貧乏性で先祖を恨らめと斯う吐しやァがるから飛び付くと，毬で突つきやがつて，乃公が落ちる途端に落ちて，足下の面を打つたのよ。堪忍して呉んねへ」

松茸は腕を組んで考へ，

「そりやァ足下の方が些と無理だぜ」「何故……」「乃公を見ねへ。まだ褌もしめねへ」

【SP】山でもって柿と栗と喧嘩をしたという，ごく昔のお話。栗の方は誠に大尽でげすから，枝葉も茂っている。隣の柿は誠に貧乏で，

「どーも，寒いなァ」「寒いと言うほど，まだそんな陽気でもねえやな」「なーに，そうでねえやな。お前なんぞは毬だの渋だの皮だの，三枚着ているからそりゃァよかろうけれども，俺を見てくんねェな。この通り柿衣一枚。寒いの寒くねえのじゃァねえやな。一つ済まねえが，毬か渋か皮か，どっちか三枚のうち一枚貸してくんねェな」「それはいけないよ，貸せないよ。なぜ貸せねえってものは，俺は三枚着で育ったんだから，貸すわけにはいかねえやな」「ナ，意地の悪いこと…」「意地の悪いわけじゃァないが貸せない。お前は貧乏性なんだから仕方がねえ」「貸せなけりゃァ貸せねえでいいや。貧乏性とは何でェ」「貧乏性だから貧乏性だってんだい」「何を言いやがんでェ」

腹立ちまぎれ，飛び付いたけれども栗にはかなわない。毬でもってポーンと突っつかれるとコロコロッと落ちると，アッ…《針トビ》下へ松茸が生えてた。松茸の頭へゴツン。

「痛えなァ，誰だい」「やあ，どうも済まねえ，堪忍してくんねェ。《針トビ》…喧嘩したんだ」「どうしたんだな」「あんなお前，角の取れねえ，訳の分からねえ奴はねえやな。あいつは毬だの渋だの皮だの，三枚着だろ。大きな面ァして暖かそうだから，一枚貸せっ

たら，貸すの貸さねえのって言いやがる。それもいいけど，突き落としゃがる。初めて俺ァ，お前《針トビ》，お前の頭へぶつかって痛かった」「ウン，痛ェのは構わねえが，そらお前が無理だ」「なぜ？」「なぜったって，お前はなァ，柿衣一枚でも着ているから，まだお前の方が幸せなんだ。そういう俺を見ねェな。ほーらこの通り，まだ褌も締めないわい」

(2)　「蛸の手」（題名は，速記本では「章魚と猫」。）〔梗概〕ナシ

【速記】此の章魚と云ふ魚は諸所の濱で捕れますが，中にも明石章魚と云つて，明石も章魚が甚い澤山捕れるそうです。是れは煮いてふえると云ふのが名物でございます。ところが此の章魚が砂場へ出て午睡をして居る。すると漁師の家に飼うてあつたものと見えて，大きな猫が出て来て，其の章魚の前の手を二本ムシャ〳〵ッと喰つて了ひ居つた……。斯う申上げると，お客さん方の中には「コレ落語家，ウダ〳〵言ひな，章魚に手があるものか，章魚は八本ながら足ぢや」と仰しやるお方もございませう。尤も『手を出して足を戴く章魚』と云ふやうな句もございますし，また『章魚の足囓るは寺の食客』と云ふ川柳もございます。八本ながら足ぢやと枝雀も心得て居りまするけれども，中には又手長章魚と云ふのもございますゆゑ，何方が何方やら分りません。段々心安い章魚に聞いて見ました所が……章魚に心安いと云ふものも有りやァ致しませんが，能く書物を調べて見ますると，前の四本は手で，後の四本は足でございまするさうで章魚は御案内の通り骨の無い奴で，血の通はぬもので，痛いと云ふ感じも起らぬと見え，グッと一寝入して不図眼を覚したが，人間でも同じことで，眼を開いた時は，チョイと顔を撫でるとか，或はチョイと脈所を掻くとか極つたものです。章魚奴が眼を覚し居つて，見ると，前の手が二本ない。

「アッ失策うた，手が二本ない，こりや何うしたんぢやらう……。アヽ彼様な處に猫奴が旨い口してくさる。ハヽア，猫奴が喰やァがつたと見える。極道奴，甚いことを爲しやァがつた。是りやァ尚と寝た態をして居よう。今度喰ひに来やァがつたら，首筋捉まへて海へ引張り込んでブル〳〵吃はして遣らう」

すると此方の猫です。

「ハヽア章魚奴が起きて呟いてくさるな，今度寝やァがつたら行つて皆喰つて了うて遣らう」「今度喰ひに来やァがつたら海へ引張り込んでブル〳〵吃して遣らう」「今度寝やァがつたら行つて皆喰つて了うて遣らう」

双方から根較べです。根較べとなつたら猫が豪い，此の穴から鼠が出ると見たら二日でも三日でも其の穴の前でチンと窺へて居る。章魚奴は到頭根負けしよつて，

「コリャ猫」「ニャンぢやい」「此處へ来て喰へ，尚だ二本残つてあるわい」「其の手は吃はぬ」

【SP】エー，一席…，世の中は……申しまする。御案内の通り，この，蛸のおいしいのは，アカー……明石蛸ちゅうて，おいしゅうございますが，エー，天気のええ日に，蛸めはすなっぱへ上がって来て，グーッと寝込んでしまいよる。漁師の家に飼うてあったもんと見えて，大けな猫めが出て来て，蛸の前の手ェをば二本，ムシャムシャッと食てしまいよる。こう

言うと，うだうだ言うない噺家，蛸に手ェちゅうもんあるかい，蛸は八本ながら足や，とおっしゃるが，こらまあ，足には違いござりません。『手を出して足をいただく蛸魚(たこざかな)』なぞォちゅう，七つ目の文句がござります。『蛸がお足か，銭のお足か，蛸の足，齧(かぶ)るは寺の居候』ってなことも言うてござりまっさかいに，そらまあ，八本ながら足には違いないと思てますが…。そうかと思うちゅうと，手長蛸っちゅやつがおまっさかいに，的(てき)さん，手やら足やら判然と分かりまへん。エまあ，段々と，心安い蛸に聞いてみたところォが…，蛸に心安いてござりまへんけれども，噺家の書物を調べますると，まったく，前の四本(しほん)が手ェで，後ろの四本が足でござりまするそうな。前の手ェ（を）二本食われよって，あと御案内の通り，あいつ（は）骨の無いやつ，血の通わんやつで，甚(えろ)う痛いちゅう感じも起こらんなんだもんと見えて，グーッと寝込んで，目ェ覚ましたが，この，寝起きちゅうのが妙なもんで，まず人間なれば，顔（を）いっぺん撫(な)ぜるとか，脈所(みゃくどこ)（を）掻くとか，ちょっと段取りのあるもんで。蛸の○○は目ェ覚まして，顔（を）なぜようと思いおって，手が無いもんやからスカタン食いよる。

「ああ，しもた。エッ，手が二本足らん。エッ，手が二本足らん。オッ，どうしたんや。おい，手が二本足らんがな。ああ，向こうに猫めが，旨い口（を）してくさるなあ。察するところ，食いやがったんじゃな，そっと。えらい目に合わしやがったなあ。なんじゃ，猫がわしを好きよるちゅうことは聞いとるけれどこと，食いやがったんじゃがな。忌々しいがきなあ。これから追(お)わいて行ったら，どうせパーッと逃げやがるやろ。待て待て。もっと，寝たふり（を）してたろ。今度食いに来やがったら，口に手ェかけて，グーッと海へ引っ張り込んで，ブルグリきかしたろ。猫…」「ああ，蛸めはぼやいとおる。ハハ，ああ，えらい旨い蛸や。今度寝やがったら，行(い)て，みな食てしもうたらんなん。ああああああ，横になりよった。あっ，寝よる寝よる。今度寝やがったら，行て，みんな食てしもうたらんならん」「おのれ，今度うせやがったら，海へ引っ張り込んで，ブルグリきかしたるのじゃ」「今度寝やがったら，行て，みな食てしもうたるわ」「今度来やがったら，引っ張り込んで，ブルブルきかしたるのじゃ。根比べや」

根比べったのやったら，猫は偉い。その穴から鼠が出ると見たら，二日が三日でも穴の際(きわ)で，じいィと考えてよる。ぼつぼつ，蛸ォが根負けしよる。

「こら，猫，猫」「何(にゃん)じゃ」「ここへ来て，これも食えェ」「へへっ，その手は食わん」

(3) 「愛宕参り」（題名は，速記本では「愛宕詣」。）〔梗概――「堀の内」別名「愛宕詣り」〕そこつ者が，そこつをなおすために堀の内のお祖師様を信心することになった。神田から堀の内へ向かって歩き出したのだが，反対方向の両国のほうへ行ってしまったり，観音様とお祖師様とまちがえたりして，一旦家へ帰りつき，出なおす。やっとのことで堀の内に着き，お賽銭を財布ごと投げ込んでしまったりしたあと，飯を食おうとして，背負って来た弁当の風呂敷包みをおろしてみると，なんと女房の腰巻で箱枕を包んであった。帰って女房にどなると，これがとなりの家だったり，ともかく無事家に帰りつく。（後略）⇒ こ

の噺は全体がかなり長くなるため，紙幅の都合も考慮して，以下には噺の後半部分のみを引用する。

【速記】「（略）たゞ此の五厘だけで仕様がございません」「腹が空つて居るのに辨當持つて来ずかい」「辨當は此處に背負うております」「夫ぢやァ辨當食べなさらんか」「其の辨當食べるにも，茶店で休むことが出来ません」「別に茶店へ行きなさるにも及びません，私は是れから，向ふにお茶所がある，彼處へ行つて食べます，茶代も何にも要りやァしません」「ア丶左様か，ア丶能う言うてお呉んなすつた」と，右の人に従いてお茶所へ遣つて参りました。

「サア，此處で一緒にお食り」「大きに有難う，貴方に教へて貰うて助かりましたが，何様しようと思ひました」「貴方の風呂敷は荒い小紋ですなァ，オ丶，紐が付いて居ますな」「失策うた，甚いことをしたわい」「何うしなすつた」「ヘエ，嬶ァの腰巻や」「エ丶ッ，腰巻で辨當包んで来るつてなことがおますかいな」「夫れでも他家の嬶ァやおまへん，私の嬶ァのことや」「何ぼ貴方の嫁さんのやつて，飯の這入つてるものぢやありませんか」「イエ，辨當は箱の中に這入つて居ますので，開げさへしたら綺麗なもので」「何ぼ開げさへしたら綺麗だつて……」「失策うた」「何うしなすつた」「辨當と思うたら是りやァ箱枕や」「オヤ〳〵，辨當と箱枕と間違へて来るなんて，慌てたお方やなァ」「是りやァ嬶ァが悪いので，辨當は其處に在る風呂敷は其處にあると言ひよつたよつて，行燈の薄暗い灯で急いで私しやァ包んだので此様なことになつたのです，ア丶ー腹がどか空りや，私しやァ家へ行んで嬶ァの横ッ面ァ殴つて遣ります」「左様な無茶しなさるな，嫁さん災難ぢや」「糞ッたれめ，味好う為して置かんもんやさかひ此様なことになつたんぢや，アノ茲な……アー忌々しい……ア丶ー空つた……」と，空腹を抱へ，呟きながらお山の半腹まで下つて来ました。すると茶店の表に赤飯が出てござります。恨めしさうな顔をして其の赤飯を睨みながら，

「ア丶ー空つた，何，一銭，二銭，三銭……五厘より有りやァせん，何うも買ふことが出来ぬ……宜し，見りやァ誰れも居らぬを幸ひ，五厘投り込んでビューと持つて遁げて遣らうか知らん，何うしても見たら動けぬが，遣つて遣らう，同じ持つて行くのなら一番大きいのを持つて行つて遣らう……小母さん，チョイと銭入れて置くぞ」ヒョイと投げ込むなり，大きな奴を取つて懐中に入れ，其んなり一散にドシ〳〵遁げ出した。

「ア丶旨い，最う此處まで遁げて来たら大丈夫だ，誰れも来居りやァせんかしらん，一番大きい奴を盗つて来て遣つた，是れだけ喰へば……アッ失策つた，大きいのを盗つて来たと思つたら店の看板や，張子盗つて来よつたんや，斯うも悪う行くものぢやらうか，いよ〳〵嬶ァの横ッ面ァ殴らにやァ居れぬ」と拳骨を固め火の様になつて怒りながら山を下つてスタ〳〵と帰つて来たは我が町内。

「エ丶イ糞ッ垂めが，味好う為して置かんかい……」と，固めた拳骨で二ッ三ッポカーリ〳〵打殴りました。

「オヤ嫌ひ，マア此様にビューンと殴りなすつて，何方や知らぬと思つたら，貴方隣りの作さんぢやァないか」「オヽ，お崎さんですか……」慌てゝ家へ戻るなり，嬶ァの前に両手を支へ，

「大きに不調法いたしました」

【SP】(略)「えらいことしたがな，銭五厘よりおまへんわ。腹減って来てますね。飯も食わずや」「アー…シナー，弁当持ってこな…」「ここへ背たろうてま（す)」「お茶所で食いなはらんかい。茶代も何にも要れしまへん」「さよか，そりゃ大きにありがとう。腹さえ膨れたらなあ，こんなり帰りますけどな」「さあ，ここでお上がり」「大きィ（に)」「あんたの風呂敷，なんじゃ紐が付いて，粗い小紋でやすな」「しもた，湯巻きでや（す)」「ええっ！」「嬶の湯巻きで包んで来たんでやす」「湯巻きで弁当…」「暗がりで，あんたなあ，嬶が風呂敷あそこにあるってったんで，あわてて包んで来たんでや（す)。それで，じかに飯は包んである（ん）やおまへん。広げさえしたらきれい…。アッタ！」「何（を）しなしたんや」「弁当やと思たら，枕包んで来た」「まっ，枕！」「あわて者やなあ，ありゃァ。こりゃ，嬶が悪いのんでやす。わたい家去んで嬶の横面張りま（す)」「(そ）んな無茶しなはんな。嫁はん災難でや(す)」「くそったれが，あんじょうさらしときやがらんうたったら，アッチャッチャッチャ…」ぼやきさがして，お山の中ほどまで下って来ますと，茶店の表に，強飯が蒸して出てやす。恨めしそうな顔をして，睨んでよる。

「銭はあらへず，取って逃げたろかしらん。やったろ。一番大きいやつ，取ったろ」

ヤッと，それを取って逃げる。

「ああ，心労。ここまで逃げて来たら大丈夫。早（う）行か…。あっ，しもた，看板盗って来たんや，張りぼてやがな。ああ，こうも悪ういくもんやろか。いよいよ，嬶の横面張らな収まらん。オーレ，くそったれが，あんじょうさらしときやがらんもんやったら，アッチャッチャッチャ…」ぼやきさがして，帰って来ました。

「こらっ，おのれら，あんじょうさらしときやがらんもんやさかい，ウータラッタ，〔パンパン〕」二つ三つ，頭を張りますなり，

「まあ，誰かしらんと思た(ら)，あんた，隣りの作さんやないか」「ああ，お崎さんでやすか」家へ戻るなり，嬶の前へ両手ェ支えて，

「ただ今は，大きィ（に）不調法いたしまして…」

6. C グループの作品についての詳細な分析

6.1 作品別の詳細

(1)「柿と栗の喧嘩」の場合

①語彙レベル

a）自立語の場合

異なりでの，両者の共通度（共通語数／異なり語数）を調べると，次の通りである。

(50 + 50)／(89 + 87) = 56.8%

この辺りの様相を，一部，具体例を挙げて見てみよう。

例（1）「栗公……」「エヽ」「寒いなァ」「寒いやァ」「寒いけれ共和郎なんぞは三枚重ねだから寒い事はねへや。渋皮に皮に毬を着て居るだらう。乃公を見やな，柿衣一枚だ。済まねへが何れでも能から一枚貸しねへな」〔速記本〕

例（2）「どーも，寒いなァ」「寒いと言うほど，まだそんな陽気でもねえやな」「なーに，そうでねえやな。お前なんぞは毬だの渋だの皮だの，三枚着ているからそりゃァよかろうけれども，俺を見てくんねェな。この通り柿衣一枚。寒いの寒くねえのじゃァねえやな。一つ済まねえが，毬か渋か皮か，どっちか三枚のうち一枚貸してくんねェな」〔SP レコード〕

噺の冒頭，発端の部分である。むろん内容・文脈的にほとんど変わることはないが，個々の語彙のレベルで見てみると，かなり大きな違いがあるのに気付く。例えば，噺の内容に関わるキーワードの一つとも言える「三枚（着）」の内容について，速記本では「渋皮に皮に毬」と言うのに対し，SP レコードでは「毬だの渋だの皮」と表現しており，順番に加えて具体例の一つも異なっている。また，この引用部分の最後の，相手へのお願いの部分でも，速記本では「済まねへが何れでも能から一枚…」と言うのに対し，SP レコードでは「一つ済まねえが，毬か渋か皮か，どっちか三枚のうち一枚…」と表現していて，大きな違いが見られる。

共通度の計算においては，文脈的に対応しているそれぞれの語が，異なりのレベルで 1 箇所違うものになると，結果的に 2 語分の異同が生まれることとなり，全体を総合して 50% を超える数値となるのは，意外に難しいことなのである。（この点に関する詳細は，6.2 節のまとめの部分で言及する。）

b）付属語の場合

付属語のうち，両者の異同に関して量的に関わるものとしては，ある程度の頻度で出現する助詞が考えられるので，その主なものについて，それぞれの作品の中での出現数を示してみよう〔速記本：SP レコード〕。両者での合計の出現数が 7 以上となる助詞を，頻度の高い順に示すと，次の通りである。

「は」—10:13，「を」—15:4，「の」—5:8，「に」—8:2，「が」—5:4，
「と」—7:2，「も」—4:3

この結果から，両者の出現度数で顕著な差が見られるのは，「を」「に」「と」で，いずれも SP レコードの方で頻度がかなり低くなっている。このうち「を」の場合は，後に言及する助詞の省略との関わりがあると考えられる。「に」については，上記の例（1）（2）の引用部分に典型的に現れているが，「三枚（着）」の列挙の部分で，（速記本における「に」が）SP レコードでは「だの」に置き換えられていて，いかにも自然な話しことばの雰囲気が伝わってくる。また「と」については，次の（3）（4）の例に挙げるような，特に引用を示す場合に，両者で顕著な違いが見られる。

例（3）「着物を三枚着て居るから一枚貸せと斯う云ふと，手前は自躰貧乏性で先祖を恨らめと斯う吐しやァがる」〔速記本〕

例（4）「あいつは毬だの渋だの皮だの，三枚着だろ。（略）一枚(いちめえ)貸せったら，貸すの貸さねえのって言いやがる」〔SP レコード〕

速記本では，「～と斯(か)う云ふ／吐(ぬか)（す）」という，やや定型かつ説明的な表現となっているのに対して，SP レコードでは，「～ったら（＝と言ったら）」「～って言（う）」といった，自然な話しことばの表現が使われている。

一方，全体の出現数が少ないため上記の助詞数一覧には挙げていないが，「へ」の場合は「1:3」と，SP レコードの場合の方が多くなっており，典型的な対照例として，「下に生て居た松茸」と「下へ松茸が生えてた」という箇所がある。なお，こうした点については此島（1973: 85）に，「今泉忠義氏が指摘しているように，口頭語では自然に「へ」を使いながらも，文章語であることを意識するとやはり「に」に落着いてしまうことが多いのである」（第五節「へ」の項目）という言及が見られ，「に」と「へ」の使われ方の違いが端的に表われている部分と言える。

②音声・表現レベル

a）助詞の融合と省略

助詞の融合については，「は」の融合の場合が「速記本 1：SP レコード 3」ということで，両者ともに例が見られたが，SP レコードの場合の方が少し目立つ結果となった。また，助詞の省略については，「を」の省略のみで「速記本 1：SP レコード 2」となっており，大きな違いは見られなかった。

b）打消し表現の「ない」と「ねえ」

二重母音［ai］の［e:］化現象は，言うまでもなく江戸・東京語の大きな特徴の一つだが，地の文では両者ともに「ない」が 1 例ずつだった。一方，会話文ではほとんどが「ねえ（ねへ）」（「10:13」）となっているが，SP レコードの会話文の中に，五つ「ない」の例があることが目についた。そのうちの 1 例は，サゲ（落ち）の箇所なので，この部分を少し丁寧に表現しようとしたためという可能性が考えられる。また，あとの 4 例については，貧乏な柿に対する“大尽”としての栗の発言の中に連続して現れていることから，そうした人物の上品・丁寧な言い回しの感じを表わす形として「ない」が使われているのかもしれない。（ただし，栗の場合でも，他のところでは「ねえ」の使用も見られる。）

③文法・文体レベル

a）打消しの助動詞

上記，「ない／ねえ」の部分でも見たが，助動詞そのものとしてその他の例（「ぬ」や「ん」）はなく，一様である。

b）アスペクト・待遇の補助動詞

両者とも，「～やがる」が 3 例ずつ使用されており，特に違いは見られない。

c）断定の助動詞〔会話文のみ〕

両者とも全て「だ」を使用しており，違いは見られない。

d）文体〔地の文のみ〕

両者とも基本的に普通体で，特に違いは見られない。

e）終助詞

この作品では，会話のやりとりの中で，終助詞の利用が盛んである。それぞれについて，具体例を頻度順に示すと次の通りである。

速記：「な（ァ）」—3，「ねへ」—4，「や（ァ）」—2

SP　：「な（ァ）」—11，「ねェ」—4，「や」—6，「よ」—1

種類としては，語調を整える「な」「や」，そして，依頼・命令を示す「ねェ（＝な）」がよく使用されている。特に SP レコードにおいては，このごく短い作品の中で終助詞が活発に使われている様相が観察され，また，「ねェな」「やな」といった融合した形式もよく見られる。速記本の場合に全体的な頻度が低いのは，明確な理由は分からないが，いちいち表記することを省略したということによるのかもしれない。

(2)「蛸の手」の場合

①語彙レベル

a）自立語の場合

異なりでの，両者の共通度（共通語数／異なり語数）を調べると，次の通りである。

(104 + 104)／(157 + 150) = 67.8%

この辺りの様相を，一部，具体例を挙げて見てみよう。

例（5）　すると漁師の家（うち）に飼うてあつたものと見えて，大きな猫が出て来て，其の章魚（たこ）の前の手を二本ムシャ〳〵ッと喰つて了（しま）ひ居（を）つた……。　〔速記本〕

例（6）　漁師の家（うち）に飼（こ）うてあったもんと見えて，大けな猫めが出て来て，蛸の前の手ェをば二本，ムシャムシャッと食（く）てしまいよる。　〔SP レコード〕

例（5）（6）の両者を参照すれば明らかな通り，（表記法や音声面の部分は別として）自立語のレベルで見ると，両者の違いは，速記本の方に「すると」「其の」の 2 語が多いのみで，あとは全く同様の語彙となる。また，たまたまの可能性もあるが，この違いの出た「すると」「其の」の 2 語に共通するのは，前後の文脈をつなげる，いわゆる「結束性（cohesion）」の働きをしているという点であり，こうした語が速記本の方に（多分，無意識のうちに）加えられているということは，両者の性格面での差異をよく象徴する現象であるように思われる。

b）付属語の場合

付属語のうち，両者の異同に関して量的に関わるものとしては，ある程度の頻度で出現する助詞が考えられるので，その主なものについて，それぞれの作品の中での出現数を示してみよう。両者での合計の出現数が 10 以上となる助詞を，頻度の高い順に示すと，次の通りである。

「の」—15:18，「が」—14:15，「は」—13:11，「に」—10:12，「を」—12:4，

「も」—12:4，「と」—8:7

この結果から，両者の出現度数で顕著な差が見られるのは「を」「も」で，ともに SP レコー

ドの方で頻度がかなり低くなっている。（合計の数が 10 未満なので，上の例には挙げなかったが，「で」の場合も 7:2 ということで，同様の傾向を示している。）「も」については理由は不明だが，「を」の場合には，後にも言及する助詞の省略との関わりがあると思われる。

②音声・表現レベル

a）「という」と「ちゅう」

一般に「X という Y」の形をとって内容説明を表わすと言われる「という」の表現については，両者では明確な違いが見られ，速記本では 8 例の全てが「と云ふ」と表記されるのに対し，SP レコードでは対照的に 8 例の全てが「ちゅう」となる。これは，（特に，速記本での）表記のルールによる相違であるとも言えるし，或いは，書きことば的な要素の（無意識の）採用による相違とも言い得るように思われる。因みに，これらのそれぞれ 8 例のうちの 4 例は，「痛いと云ふ（ちゅう）感じも…」というような，全く同一の文脈に現れたものである。

b）助詞の融合と省略

助詞の融合については，「は」の融合した例がそれぞれ二つずつで，両者には特に大きな違いは見られない。（速記本：「有りやァ致しません」「こりや何（ど）うしたんぢやらう」，SP レコード：「こらまあ（＝これはまあ）」「そらまあ（＝それはまあ）」）

一方，助詞の省略に関してはかなり大きな違いが見られ，速記本では「を」の省略だけが 2 例のみであるのに対して，SP レコードでは，「を」の場合だけで 9 例見られる上に，「は」と「が」の省略も 1 例ずつ見られる。そうした対照の典型的な様相を，次の例（7）（8）に示しておこう。

例（7） 章魚（たこ）は御案内の通り骨の無い奴（やつ）で，血の通はぬもので，痛いと云ふ感じも起（おこ）らぬと見え，グッと一寝入（ひとねいり）して不図（ふと）眼を覚（さま）したが，人間（われわれ）でも同じことで，眼を開（あ）いた時は，チョイと顔を撫（な）でるとか，或（あるひ）はチョイと脈所（みゃくどこ）を掻くとか極（きま）つたものです。 〔速記本〕

例（8） 御案内の通り，あいつ骨の無いやつ，血の通わんやつで，甚（えろ）う痛いちゅう感じも起こらんなんだもんと見えて，グーッと寝込んで，目ェ覚ましたが，この，寝起きちゅうのが妙なもんで，まず人間なれば，顔いっぺん撫（な）ぜるとか，脈所（みゃくどこ）掻くとか，ちょっと段取りのあるもんで。 〔SP レコード〕

③文法・文体レベル

a）打消しの助動詞

打消しの助動詞に関しては，速記本では「ぬ」が 3 例と「ん」が 2 例（ともに「マセン」）であるのに対し，SP レコードでは，7 例の全てが「ん」（うち，「マセン」1，「マヘン」2）となっている。SP レコードの場合は聴き取った音声から判断するため，「ぬ」となるケースはほとんどあり得ないが，速記本の場合は，やはり書きことば的な認識から，一部に「ぬ」の表記が現れたものと想像される。

b）アスペクト・待遇の補助動詞

アスペクト・待遇に関わる補助動詞の出現状況を，地の部分と会話部分とに分けて示すと，次の通りである。

《地の部分》　速記：「（動詞＋）居(を)る」2,「て居(を)る」2,「てある」1
　　SP　：「（動詞＋）よる」6,「てよる」1,「てある」1
《会話部分》　速記：「て居(る)る」2,「てある」1／
　　「てやる」4,「やがる」6,「てくさる」2
　　SP　：「よる」4,「とる（テオル）」2／
　　「たる（テヤル）」2,「やがる」8,「てくさる」1

速記本の場合の表記部分が，実際にどのように発音されていたかについては推測するしかないのは残念だが，こうして対比してみると，概ね同様の表現が使用されていることが分かる。

次に示す例（9）（10）は，具体的な対応部分であるが，「～てくさる」「～やがる」「～てやろう（たろ）」といった部分で全く共通の表現が見られ，音声的な融合部分を別にすると，内容的にはほぼ同様の表現で描き出されていることが分かる。

例（9）「ア丶彼様(あん)な處(とこ)に猫奴(め)が旨い口してくさる。ハ丶ア，猫奴が喰やァがつたと見える。極道奴(め)，甚(えら)いことを爲(さら)しやァがつた。是(こ)りやァ尚(もっ)と寝た態(ふり)をして居(る)よう。今度喰ひに来やァがつたら，首筋捉(つか)まへて海へ引張(ひっぱ)り込んでブル〳〵吃(く)はして遣(や)らう」
〔速記本〕

例（10）「ああ，向こうに猫めが，旨い口してくさるなあ。察するところ，食いやがったんじゃな，そっと。えらい目に合わしやがったなあ。（略）待て待て。もっと，寝たふりしてたろ。今度食いに来やがったら，口に手ェかけて，グーッと海へ引っ張り込んで，ブルグリきかしたろ。」
〔SP レコード〕

c）断定の助動詞〔会話文のみ〕

会話文における断定の助動詞については，速記本では 4 例の全てが「じゃ」であるのに対して，SP レコードでは「じゃ」が 5 例，「や」が 5 例と，二つが拮抗している。全体の用例数が少ないので早計には判断できないが，SP レコードではその出現を聴き取ることができる当時の新形式である「や」が，速記本では未だ表記の形式にはなっていない模様で，定型的な形を保持する速記本に対して個々具体的な SP レコードという，両者の性格的な違いが垣間見られる部分と言える。

d）文体〔地の文のみ〕

地の文の文末表現である文体については，速記本と SP レコードの結果をまとめると，次の通りである。

速記：「ございます」体―3,「です・ます」体―5，普通体―4
SP　：「ございます」体―2,「です・ます」体―3，普通体―7

両者ともに，各種の文体が使用されている様相が窺える。使用の割合からは，速記本の場合の方が少しかっちりとした印象を受けるのに対し，SP レコードの場合の方はややくだけた感じが見られるといった傾向は窺えるところである。

(3)「愛宕参り」の場合

①語彙レベル

a）自立語の場合

異なりでの，両者の共通度（共通語数／異なり語数）を調べると，次の通りである。

(89 + 89)／(167 + 110) = 64.3%

先に，5.3 の（C）の部分に掲げた通り，この噺の場合，内容的に共通する部分をそれぞれ引用すると，その部分の量的な差が大きいことに気付く。大まかな感じでは，速記本の方が SP レコードの 1.5 倍程度の長さを持っており，その点が反映する形で，それぞれの異なり語数（全体）でも，「167:110」と，約 52% 増しになっている。つまり語彙面から見ると，両者における共通語彙の割合は，SP レコードの場合にはかなり高い数値（81%）となり，他方，速記本の場合には，それより相対的に低い数値（53%）となる。その両者を総合すると約 64% ということになるが，この値は一般的には比較的高い数値であると言える。

その辺りの傾向が比較的明確に現れている部分を，次に引用してみよう。

例（11）「アッ失策(しま)つた，大きいのを盗つて来たと思つたら店の看板や，張子(はりぼて)盗つて来(き)よつたんや。斯うも悪う行くものぢやらうか，いよ〳〵嬶ァの横ッ面(つら)ァ殴(は)らにやァ居(を)れぬ」〔速記本〕

例（12）「あっ，しもた，看板盗って来たんや，張りぼてやがな。ああ，こうも悪ういくもんやろか。いよいよ，嬶(かか)の横面張らな収まらん」〔SP レコード〕

ただし，上にも述べた通り，速記本の場合には，単に表現がやや長くなるばかりでなく，特に噺の中の説明的な部分で，SP レコードにはそこに該当する内容が見られないところがあり，こうした部分が共通度を下げる大きな要因となっている。

b）付属語の場合

付属語のうち，両者の異同に関して量的に関わるものとしては，ある程度の頻度で出現する助詞が考えられるので，その主なものについて，それぞれの作品の中での出現数を示してみよう。両者での合計の出現数が 10 以上となる助詞を，頻度の高い順に示すと，次の通りである。

「を」—22:13,「の」—17:6,「は」—12:7,「が」—10:7,「に」—13:2,
「と」—8:2,「で」—5:5

先にも述べた通り，速記本の場合の方が，該当する（＝引用した）部分の全体的な量が多いため，そうした状況を勘案した上で，それでもやはり両者における出現度数で顕著な差が見られるものとしては，いずれも速記本の方で頻度が高いものとして，「の」「に」「と」が挙げられる。このうちの「の」と「と」については，例えば，「……』と，右の人(じん)に従(つ)いてお茶所へ……」「……』と，拳骨(げんこつ)を固め火の様(やう)になつて……」（ともに，速記本）という箇所に見られるように，SP レコードの場合には存在しない説明的部分の記述の中に現れている例が典型的なものと言える。また，「に」については，例えば「辨當は此處(ここ)に背負(せたら)うております〔速記〕」「（弁当は）ここへ背たろうてま（す）〔SP〕」という部分のように，速記本に

おける「に」が，「へ」に置き換えられたり省略されたりしていることが，両者における違いの原因になっていると考えられる。

②音声・表現レベル

a）助詞の融合と省略

助詞の融合については，「は」に関して，速記本では（全体が 12 の中で）4 例，SP レコードでは（全体が 7 の中で）2 例，ということで，両者に大きな違いは見られなかった。一方，助詞の省略に関しては，速記本では「を」が 10 例（「を」全体の 45%），「は」が 1 例（「は」全体の 8%）であるが，SP レコードでは「を」が 11 例（全体の 85%），「は」が 2 例（全体の 29%）と，両助詞とも省略の比率が遥かに高いのに加えて，速記本では例の見られない「が」（3 例）や「へ」（1 例）にも省略の例が見られ，こうした点でも両者には顕著な違いがあると言えそうである。

③文法・文体レベル

a）打消しの助動詞

打消しの助動詞に関しては，速記本では「ん」が 11 例（うち，「マヘン」1），「ず」が 1 例，「ぬ」が 5 例であるのに対し，SP レコードでは「ん」が 7 例（うち，「マヘン」3），「ず」が 2 例，となっている。速記本の場合に書きことば的な認識からある程度「ぬ」の表記が見られること，及び，SP レコードで「～マヘン」が広がりつつあることが分かる。

b）アスペクト・待遇の補助動詞

アスペクト・待遇の補助動詞の出現状況を，この作品では（地の部分にはほとんど見られないため，）会話部分から示すと，次の通りである。

速記：「なさる」—6，「てやる」—5，「よる」—3

SP　：「なはる」—2，「たる（＝てやる）」—2，「やがる」—3

先にも述べた通り，該当部分の量的な差とも関わり，出現数には違いもあるが（SP レコードの方が少ない），内容的には両者がほぼ対応している様相が見てとれる。その中でも特に注目したいのは，「なさる」と「なはる」の対応で，次の例（13）（14）に見られる通り，ほぼ同一の文脈においてそれぞれが使われており，両者における表現の差が際立っている。（因みに，引用部分の最後に偶然出現する「嫁さん」と「嫁はん」の部分にも，「さ」⇒「は」という，これと同様の対応の様子を窺うことができる。なお，こうした現象については，桂米朝 1982 などを参照のこと。）

例（13）「夫ぢやァ辨當食べなさらんか」（略）「左様（そん）な無茶しなさるな，嫁さん災難ぢや」

〔速記本〕

例（14）「お茶所（ちゃじょ）で食いなはらんかい」（略）「（そ）んな無茶しなはんな。嫁はん災難でや（す）」

〔SP レコード〕

c）断定の助動詞〔会話文のみ〕

会話文における断定の助動詞では，速記本では「だ」が 1 例，「じゃ」が 3 例，「や」が 8 例となっているのに対して，SP レコードでは 8 例の全てが「や」となっている。ある程度

話しことば的表現が安定していると言える SP レコードに対して，速記本ではやや古い形式とも言える「じゃ」の残存が見られる。1 例出現している「だ」は，次のような文脈に出現しているが，ここに現れている理由は不明であり，前後の部分との関わりの点でも，不自然なものと考えられる。

例（15）「ア丶旨い，最(も)う此處まで遁げて来たら大丈夫だ，誰れも来(きを)居りやァせんかしらん，（略）」〔速記本〕

d）文体〔地の文のみ〕

地の文の文末表現である文体については，速記本と SP レコードの結果をまとめると，次の通りである。

速記：「ございます」体—1，「です・ます」体—3，普通体—1

SP　：「ございます」体—0，「です・ます」体—3，普通体—2

この噺では地の部分が少ないため，両者に大きな違いはなく，速記本の場合にある「ございます」体の 1 例が，目に付く程度である。

6.2 3 作品全体のまとめ

①語彙レベル

a）自立語の場合

6.1 において個別に見てきた 3 作品の場合，異なりでの両者の共通度は，それぞれ 56.8/67.8/64.3 となり，単純にそれらの平均を取ってみると，「63.0%」となった。この数値の持つ意味について，他の調査結果の場合と比較・検討してみる。

他の調査というのは，筆者自身がかなり以前に行なったもの（金沢 1986）である。上方落語の一作品（『阿弥陀池』）を材料として，「同一演者・同一作品」や「師弟演者・同一作品」などの場合に，異なりレベルでの両者の共通度を調べてみたものであり，その結果は次の通りである。

・「同一演者・同一作品」の場合（2 件〈異なる演者〉の平均）＝ 77.2%
・「師弟演者・同一作品」の場合（2 件〈異なる師弟〉の平均）＝ 49.2%

この数値のうち，特に前者の「同一演者・同一作品」の場合に，共通度が 90% にも遥かに及ばないという点に関して，疑問をお持ちになる方も多いと思われるが，たとえそうした条件に従う作品であっても，落語の口演というのはあくまでも（一回一回が）一つの生きたパフォーマンスであり，意図的な変化の場合も無意識的な変化の場合もさまざまであるが，結果としてはこの程度の共通度となっているのである（⇒逆から見ると，この数値を 100 から引いた結果の数字〈22.8%〉が「差異」）。さらに後者の「師弟演者・同一作品」の場合になると，時間的な経過やそれぞれの演者（師と弟子）による自分独自の噺の練り上げ方の問題なども加わって，約 50% 程度という，一見したところではかなり低い共通度となっている。

こうした先行例と比較して考えると，今回の調査における（速記本と SP レコードの場合の平

均共通度である）「63.0%」というのは，上記の両者（前者と後者）のほぼ中間に位置する数値となっており，数値に対する単純な評価という点では，かなり高いものとして判断できるのではないかと考えられる。

b）付属語の場合

これまでも見てきたように，付属語のうちで，量的な面から両者（速記本と SP レコード）の違いに関わるものとしては助詞の場合が考えられ，中でもその出現数に顕著な差が見られる（⇒速記本で多く，SP レコードで少ない）例として，①「を」，②「の」や「と」，③「に」，を挙げることができる。

そして，そうした傾向が見られる原因と考えられるポイントとして，①の「を」の場合には，助詞の省略現象からの影響が考えられ，また，②の「の」や「と」の場合には，速記資料の場合に特有な説明的な部分においてこれらが出現しやすいという現象が考えられる。さらに，③の「に」の場合については，ほぼ同一の文脈において出現可能な「に／へ」の使い分け現象との関わりが考えられ，書きことば的な状況に使用されやすい「に」と，話しことば的な状況に使用されやすい「へ」との性格の違いが，影響を及ぼしている可能性が推測できる。

②音声・表現レベル

この部分でまず検討の対象になるのが，助詞の融合と省略の現象である。融合については，いずれの作品においても顕著な差は見られず，速記本においても部分的に融合を反映する表現が表われている。一方，省略については，東と西の違いという，元来の言語表現における差異が関わっていることも考えられるが，特に西（大阪）の作品の場合には比較的顕著な差が見られており，SP レコードの方では，「を」を代表とする省略される頻度の高さや，「は」「が」「へ」などへの省略現象の広がりの様相が目に付く。

その他，東京と大阪のそれぞれにおいて，個別の現象も注目され，東京の場合には，今回の場合には量的な差はほとんど見られなかったが，江戸期以来の有名な現象である打消し表現における「ない」と「ねえ」の使い分けは検討の対象になり得るものである[5]。一方，大阪の場合には，「という」の表現における「ちゅう」の形の出現が注目され，作品によっては，速記本と SP レコードでほぼ明確な使い分けが行なわれているという様相も見て取ることができた。

③文法・文体レベル

この部分に関して，東京の作品（一つ）の場合には，両者に特に目に付く差異が見られないため，以下では大阪の作品に限定して述べる。

まず，打消しや断定の助動詞に関しては，速記本では前の時代から使われてきたと考えられる「ぬ」や「じゃ」が，ほぼ安定して出現しているのに対し，SP レコードでは当時の新形式と考え

[5] 二重母音［ai］の［e:］化現象の反映である，打消し「ない」の「ねえ」化は，江戸期以来，長期に亘って江戸・東京において定着している可能性があり，公的な表現や丁寧な物言いの場合を除くと，日常的な話しことばの表現としては，速記においても「ねえ」の使用がある程度定着していた可能性は考えられるように思われる。

られる「ん」や「や」の出現の広がりが一部に見られる。こうした点に関しては，例えば現代においても，NHK などの放送では，一般人のインタビュー・コメントなどで，現実の話しことばではよく登場する“ラ抜き”表現が使われた場合，その部分を文字の形で示すテロップにおいては，“ラ抜き”ではない（いわゆる，伝統的な「ラ入れ」の）表現が書きことばとして写し出されるようなケースもしばしば見られ，こうした場面に話しことばと書きことばの部分的な乖離の様子が象徴的に表われていると言える。

またその他にも，SP レコードの方には，大阪方言において比較的著名な「s ＞ h」への交替現象である「～マヘン」「～ナハル」「～ハン（＝さん）」などの表現が散見され，現代にも繋がる関西方言の象徴となる各種の表現が，この時期から定着しつつある様相の一端が観察されるのである。（こうした現象の詳細については，前田（1949，1977），金沢（1998）などを参照のこと。）

他にも，大阪において多様な表現の広がりが観察され，アスペクト・待遇の補助動詞や文末表現に関して，両者は全体としてはほぼ似通った様相を見せつつ，部分的には SP レコードの場合に，現代にも繋がるような，より話しことば的な表現が使われている片鱗が見られるのである。

7. おわりに

以上，所期の目的を考えつつ，これまで検討してきたことを箇条書きにまとめると，次の通りである。

- 明治期における落語の速記資料と SP レコード資料は，社会の中で盛んとなる時期については少しずれているところもあるが，ほぼ同時期において，同一演者による同一の作品が，それぞれの形の資料として存在する場合がある。
- それらの資料の中には，量的には非常に稀だが，落語の速記（本）で，実際の口演にある程度近いと考えられるようなものが，いくつか存在している。
- 速記資料と SP レコード資料の全体的な類似性（とでもいうべきもの）を，自立語に限定しての異なりレベルの語彙の共通度から想定してみると，その共通性はかなり高いと言える。
- ただし，具体的な表現に関して細かい部分の分析を進めてみると，速記資料の場合には随所に，書きことばらしさが表われた，「説明」に当たるような表現の見られる箇所（6.1 の例（11）などを参照）がある。
- 表記や（文章）理解の問題とも関わるが，助詞の融合・省略のケースや文法・文体のレベルなどでも，速記資料の場合にはやはり文章語としての性格がしばしば顔を覗かせており，両者の違いはそれなりにはっきりしていると言える。

落語という口演芸能を材料として，ほぼ同時期における，同一演者による同一の噺を，速記本と SP レコードという二種類の遺された資料によって比較・検討してきたが，噺の骨格や進め方は兎も角として，話しことばというパフォーマンス部分から見る限りでは，両者には比較的大きな隔たりがあると言え，結果的に，速記資料における話しことばの「直写」性については，かな

りの留保が必要であろうことがほぼ明らかとなった。

ただしその一方で，語彙面や語法・文法などのレベルでは，その後の展開を SP レコードやその他の資料によって裏付けることが可能となるような場合には，通時的な流れの中にある（明治期の）貴重な資料として，そこに表われた具体的な言語表現を前向きに位置付けてゆこうとするような姿勢も可能なのではないかと考える。

また，他方 SP レコード資料に関しては，従来から言われている通り，そこに表われている表現の中に，芸能資料としての謂わば“作為性”のようなものがどの程度含まれているのか（或いは，含まれていないのか）という点に関する検証についても，今後引き続き行なわれてゆく必要があるだろう。

そうしたさまざまな点について，課題はまだまだ山積していると言えるが，兎にも角にも，将来に亘ってさらに有効な口語的資料が現れることがほとんど期待できない状況にある今日において，こうして現代に遺された貴重なものとしての落語資料については，慎重を期しつつも，より広範な方向から積極的に活用されてゆくことを期待したい。

参照文献

福岡隆（1978）『日本速記事始』（岩波新書 57）東京：岩波書店.

肥田皓三（1977 ～ 78）「大阪落語の速記本（一）～（八）」『上方芸能』51 ～ 59.

金沢裕之（1986）「話芸におけることばの伝承と変遷―上方落語『阿弥陀池』の場合―」『大阪大学日本学報』5: 21–60.

金沢裕之（1998）『近代大阪語変遷の研究』大阪：和泉書院.

金澤裕之（2015）「明治末・大正・昭和前期の SP レコード資料一覧」『日本語の研究』11(2): 141–146.

桂米朝（1982）「小論「さん」と「はん」」『米朝落語全集　第六巻』大阪：創元社.

此島正年（1973）『国語助詞の研究（増訂版）』東京：桜楓社.

前田勇（1949）『大阪辨の研究』大阪：朝日新聞社.

前田勇（1977）『大阪弁』（朝日選書 80）東京：朝日新聞社.

都家歌六（1987）『落語レコード八十年史（上・下）』東京：国書刊行会.

野村雅昭（1977）「落語・講談」佐藤喜代治（編）『国語学研究事典』824–826. 東京：明治書院.

越智治雄（1968）「円朝追跡」『国語と国文学』530: 9–24.

清水康行（1982）「今世紀初頭東京語資料としての落語最初のレコード」『言語生活』372: 50–59.

清水康行（1983）「言語資料として見た速記本『怪談牡丹燈籠』における二重性」『創立二十周年記念鶴見大学文学部論集』189–215.

清水康行（1996）「録音資料の歴史」『日本語学』15(5): 91–99.

清水康行（1998）「速記は「言語を直写」し得たか―若林珇蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性―」『文学』9(1): 44–52.

進藤咲子（1982）「三遊亭円朝の語彙」佐藤喜代治（編）『講座日本語の語彙 第六巻 近代の語彙』127–147. 東京：明治書院.

杉本つとむ（1962）『にっぽん語の超克』東京：寧楽書房.

暉峻康隆・興津要・榎本滋民（編）（1980）『口演速記　明治大正落語集成　第一～五巻』東京：講談社.

東大落語会（編）（1969）『増補落語事典』東京：青蛙房.

矢島正浩（2006）「落語録音資料と速記本―五代目笑福亭松鶴の仮定表現の用法から―」『国語国文学報』64: 1–17.

矢島正浩（2007）「五代目笑福亭松鶴落語における原因・理由表現の用法」『愛知教育大学大学院国語研究』15: 1–15.

山本正秀（1965）『近代文体発生の史的研究』東京：岩波書店.

柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二（編）（1961）『座談会明治文学史』東京：岩波書店.

Colloquial Japanese in Materials from the Early Modern Period: Shorthand Writings and 78 rpm Disk Recordings of *Rakugo* in the Kanto and Kansai Regions

KANAZAWA Hiroyuki

Yokohama National University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

This article compares shorthand writings of *rakugo* (comical stories) published during the Meiji Period and their spoken versions recorded on 78 rpm disks during the same period. It examines characteristics of language use in the two media, particularly focusing on identical stories by the same storytellers.

Although similarities are to be found in the structure of the stories and lexical choice, they bear little resemblance in terms of the characteristics of spoken language. The findings suggest that it is necessary to investigate the characteristics of shorthand writings as a linguistic resource, before we make use of them for research as representative of spoken Japanese in the Early Modern Period.

Key words: *rakugo* (comical story), shorthand writing, 78 rpm disk record, characteristics of Japanese spoken language